

## 徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」議事要旨

- I 日 時 平成28年10月25日（火） 10:00～12:00
- II 場 所 徳島大学 常三島キャンパス 地域創生・国際交流会館 5階  
フューチャーセンター「A. BA（アバ）」（徳島市南常三島町1丁目1番地）

### III 出席者（敬称略）

【委員】 10名中 8名出席

青木正繁（部会長），近藤明子（副部会長），  
蔭山洋子，川眞田 彩，近森由記子，池添純子，岡田育大，竹内祐介

【オブザーバー】 10名中 6名出席

板東純平，山下哲央，蔵本聖子，松本秀明，石井里奈，土井由香梨

【県】

選挙管理委員会書記長  
学校教育課長  
総合政策課政策調査幹 ほか

### IV 次 第

- 1 開 会
- 2 議 事  
(1) 若者と選挙について  
(2) その他
- 3 閉 会

（配付資料）

- ・総合計画審議会「若者クリエイト部会」資料
- ・資料1 第24回参議院議員通常選挙年齢別投票者数調（18歳・19歳）（全数調査）
- ・資料2 年齢別投票率の比較（H28・H25全国集計比較）
- ・資料3 衆議院議員総選（大選挙区・中選挙区・小選挙区）における投票率の推移及び参議院議員通常選挙（地方区・選挙区）における投票率の推移
- ・資料4 18歳選挙権の取組

(佐藤政策調査幹)

それでは定刻が参りましたので、ただいまより若者クリエイト部会を開催させていただきます。まず徳島県の選挙管理委員会の森口書記長より御挨拶を申し上げます。

(森口書記長)

皆さんおはようございます。徳島県の選挙管理委員会書記長の森口でございます。若者クリエイト部会の開催にあたりまして、一言御挨拶を申し上げたいと思います。本日は、青木部会長様、近藤副部会長様、それから委員の皆様、オブザーバーの皆様、各自におかれましては大変お忙しい中、御出席を賜り本当にありがとうございます。また日頃より、総合計画審議会の若者クリエイト部会ということで、県政各般にわたりまして、正に若者の視点から、様々な御提言を頂くなど格別の御理解と御協力を賜っておりますことを、改めて感謝を申し上げます。

さて本日のテーマは、若者と選挙ということでございます。御承知のように、この夏、第24回参議院議員通常選挙が行われました。徳島におきましては、皆様新聞等で御承知と思うんですが、憲政史上初となる高知県との合区ということが行われました。それともう一つ大きなテーマといたしましては、70年ぶりの改正となります選挙権年齢の引き下げ、18歳選挙権、これが初めて適用されたという選挙でございました。結果は、投票率がやっぱり芳しくなかったということでございまして、参議院選挙におきましては徳島県で最低を記録したという、非常に残念な結果となりました。投票率が下がっていく中で、特に若者の投票率がなかなか低いということが一つの我々の課題でありまして、その辺りにつきまして今日は、皆様から何故若者が投票に行かないのか。それから教育委員会のほうから、高校生に対してアンケート調査をしておりますので、そこから見えてくるもの。最後に、どうやったら若者の方々に選挙に行ってもらえるのか。こういう3つの視点で皆様から若者の意識でありますとか、投票方法に関しまして御意見を頂戴したいと考えておる次第でございます。皆様方におかれましては、大所高所から御意見・御提言を賜りますようお願いを申し上げます。甚だ簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

(佐藤政策調査幹)

ありがとうございました。それではこの後の進行につきましては、青木部会長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

(青木部会長)

それでは早速議事を進行してまいります。なお、本日の部会は徳島県総合計画審議会公開要綱の第9条第1項に基づき、公開での開催とさせていただきますので、御了承ください。また今回もビデオでの公開に向けて、本日撮影をすることとなっておりますので、重ねて御了承ください。それでは議事に移りたいと思います。本日は若者と選挙についてというテーマで意見交換をお願いしたいと思います。まず始めに、事務局から本日の資料についての御説明をよろしくお願ひいたします。

(森口書記長)

選挙ということでございますので、数値を皆様に知っておいていただきたいということで、今回の参議院選挙の結果の数値について簡単に御説明したいと思います。

レジュメの1枚目のところにあるかと思いますが、今回の参議院通常選挙、徳島県の投票率は46.98パーセントという結果でございました。全国は54.70パーセントということで、徳島県につきましてはワースト2位。ちなみに最下位は高知県だったということでございます。

次に、今回のポイントになります18歳、19歳でございますけれども、18歳が41.20パーセント、19歳が30.70パーセント。18歳と19歳を足した投票率は36.01パーセントというふうな結果になっております。全国と比較をしていただきましたら、この部分でも全国より少し低くなっているというところでございます。

次に20代でございますけれども、35.22パーセント。30代が40.44パーセントということで、年齢が上がるに従って投票率も上がっていているという傾向でございます。ここに書いてありますように、18歳、19歳の投票率ベスト5、ワースト5はどこだったかというところ、四国4県が皆ワースト5に入っているんですね。一方でベスト5は東京が1位になっております。東京については実は全体の投票率よりも若者の投票率が高かった。これを見ていただくとわかると思うんですけども、やはり人口の多いところ、若者の多いところでは若者の投票率が高くなっているということが見て取れるのではないかなと思います。

1枚めくっていただきましたら、全国の数値を並べた表になっております。今、私が申し上げた数値がここに入っております。今回の、18歳、19歳の若者が加わりますことによって、日本で新たに240万人の有権者が生まれました。徳島県内では14,000人新しい有権者が生まれたというふうなことになります。ちなみに赤が上位5件。青が下位5件ということになっております。

次のページ、3ページをめくっていただきましたら、年齢別の投票比較、これは前回の参議院議員選挙との比較でございますけれども、抽出調査にはなるんですけども、年齢別でどのような傾向が現れているかというところ。先程申しましたように、20代から段々と投票率が上がっていているというふうな傾向となります。今回の場合、20代につきましては全国においては20～24歳までが33パーセント、25～29歳が37パーセントという結果でございました。前回との比較でいきましたら、約2～3ポイント程度しか増えていないという状況なんですけども、これは全国の状況でございまして、徳島だけの状況で申しましたら、実は前回の参議院議員選挙の20代、30代の投票率は大体25～31パーセントの間ぐらいだったんですけども、今回ですね、31～35パーセントということで7ポイント増えております。これが徳島県の面白い傾向かなと。やはり18歳、19歳に引かれて、20代の若者も触発を受けたというふうなところでございます。

続きまして4ページを御覧いただきたいと思っております。これは過去の衆議院議員選挙、参議院議員選挙の投票率の推移ということでございます。上をご覧いただいて、衆議委員議員選挙につきましては、平成21年ですね。これはまさに政権交代が起こったときの選挙でございまして、このときが69.28パーセントで、その後2回は大きく下がっていると。参議院議員選挙につきましては、平成10年以降横ばいという状況が見て取れるかと思っております。

そういうふうな状況に対して我々選挙管理委員会なり教育委員会がどういふふうな選挙

啓発の取組をしているのかというものを5ページ、6ページにまとめております。5ページのところは選挙管理委員会の取組ということで御紹介しております。実は選挙啓発と申しましたら通常啓発、常にやっている啓発と、選挙のときに特に重点的に行っている啓発の2つに分かれております。通常時におきましては、若者の方に色々な選挙に関する知識を持ってもらうということで、学校等に赴きまして、出前講座でありますとか、市町村と連携して各市町村の小学校等に行く講座等を開催しております。

それから、今回の選挙では18歳選挙権ということでございまして、選挙啓発の動画を募集させていただきまして、徳島北高校の動画が最優秀となり、それを後の選挙啓発に活用させていただきました。そのときのテーマが、「1票が未来を決める」ということで、「自分の1票で未来が決まってくんだ。」ということをやテーマにした動画でございました。

それからまたこの冬には、参議院選挙を踏まえて若者向けの選挙啓発のシンポジウムなんかもやっていきたいと。広報としましては、新聞でありますとか選挙CMでありますとか、それから県広報での周知でありますとか。

また、今回の参議院選挙のときに行ったこととしては、やはり若者ということでございまして、今年の2月に18歳を迎えた県出身の歌手で女優の上野優華さんに選挙啓発大使を依頼しまして、呼びかけたりと。あと、若者につきましては特にツイッターをよく活用しているということで、選挙管理委員会でツイッターを立ち上げまして、色々な選挙情報を発信した。こういうふうなことに取り組んできたということでございます。このような取組につきましても、色々御意見を頂戴したいと思いますので、参考に御説明いたしました。

続きましては教育委員会。

(後藤学校教育課長)

県教育委員会学校教育課の後藤と申します。よろしく申し上げます。

1ページ目にかえていただきまして、2の高校生アンケート結果について報告させていただきます。今回の参議院議員選挙を受けて、県教育委員会では主権者教育を実施する上での課題等について把握するとともに、今後、県教育委員会が発行を予定している指導の在り方を示した指針、政治的教養を育むための生徒向けのハンドブックを作成する歳の参考とするために調査を行いました。調査対象は、公立の高校、特別支援学校高等部の3年生以上の生徒約6,000名を対象に行いました。対象期間は、公職選挙法の改正があった昨年、平成27年6月から今年の7月まで。調査期間は、選挙が終わりました7月14日に調査を依頼しまして、8月にかけて調査を行いました。その結果、生徒に対しては、学校の教育活動によって政治に対する関心が高まったかとか、政治や選挙について家族や友人と話をする機会が増えたか等の設問を行いました。一番最後の設問として、そこに書いてありますように、選挙権年齢に達した場合、投票について、あなたはどの考え方にもっとも近いのですかということで、「投票に行く」というのが49.9パーセント、「たぶん投票に行く」というのが32.3パーセントで、合わせて82.2パーセントということで、主権者教育と申しますか、政治的教養を育む教育の一定の成果が現れたのではないかと考えております。それに対して「投票に行かない」が6パーセント、「分からない」というのが11.7パーセントありまして、その理由を問うと、下にありますように、「政治や選挙に興味がないか

ら」、「候補者を選ぶ自信がないから」、「政治が難しいから」というふうな回答が寄せられております。

県教育委員会の取組といたしましては、6ページにまとめてありますけれども、主権者教育に関する教員研修会、それから小学校・中学校・高校・特別支援学校における出前講座、選挙管理委員会さんにも、市町村の選挙管理委員会も含めまして御協力いただきまして、模擬投票等も実施いたしました。

総務省と文部科学省が作成した副教材、「私たちが拓く日本の未来」というのが昨年12月に配布されて、それを活用して主に主権者教育が行われております。

県教育委員会としましては、参議院選挙に向けて、「一票でかわる未来」というリーフレットを作成して配布しております。

今後もアンケート結果を参考にして、先ほども申しましたけれども、教員向けの指導指針とか、生徒向けのハンドブック等を作成して主権者教育を充実させていきたいと考えております。報告は以上です。

(森口書記長)

言い忘れたことがあります。資料6ページの一番上のところ、市町村選管の取組を申し上げます。今回、徳島市選管におきましては、投票しやすい環境ということで、徳島大学のこの建物の中に、期日前投票所を設けていただきました。学生の方も気軽に投票できる。それと選挙当日には、文理大学とかショッピングセンターとか、こういうところにも投票所を設けて、投票しやすい環境というのをやっていただきました。

このほか、選挙事務を高校生が体験するとか、18歳の方が選挙サポーターとなって投票を呼びかけるとか、あと投票に行きましたら、投票立会人がいると思うんですが、その投票立会人に18歳、19歳の方をお願いしたとか、そういう意識を高める取組を市町村選管でやっていただいたところです。

(青木部会長)

どうもありがとうございます。それでは皆様方から御意見を伺いたいと思います。なお、若者と選挙という観点からでございますので、大きな視点はありますが、まとめてでもいいし、この視点を少しお話したいといったことでも構いません。自由にどなたからでも結構でございますので、御発言のほうをどうぞよろしく願いいたします。

(近藤副部会長)

資料の1ページに書かれておりますように、関心を高めるといふのと、投票しやすくするという2つの観点があるかと思うんですが、このうちの2番目の投票環境がどうなのかっていうところで、特に大学生は結構深刻な問題なんですけど、県外から大学にきて住民票を移動してなくて、今住んでるところでは選挙権が無いっていう人達が結構多いんですね。松山市がその調査を行っている中で、松山市300人にアンケートを取って、ここに住民票ありますかという質問をすると、6割がなくて、松山市に住民票があるよという人が4割っていう結果になってるんですね。そうしたらそこの地域に住んでる人の中で、更に行く人行かない人がいるので、そういうことになるとどんどん選挙の投票率っていうのは下が

っていく。わざわざ帰って住民票があるところで選挙をするのはちょっとしんどいなっていう人が多いかなっていうのが、多分現状の大きな問題だと思います。

私も何人かの学生に聞いてみたんですが、住民票移してませんって。実家に帰るのが遠いので行かないかなあっていう話をしている学生もいました。このことも踏まえて、じゃあドラスティックに投票のスタイルを変えるっていうのはなかなか難しい問題かと思いますので、そこの辺りで何か工夫できることもあるかなっていうのもちょっと考えていかないといけないかなっていう話題提供です。以上です。

(板東委員)

今、近藤副部長が仰ったことは非常に大きな問題提起だと思うんです。結局、投票率って割り算で表されるわけなんですけれども、例えば徳島から県外に出ていった人が住民票移さないままでいたら、当然投票は事実上できないでしょうから、そうすると分母である住民票の数は変わらないまま、事実上投票に行けない人っていうのがいっぱい出てきてしまうんで、確か有権者はやっぱり住民票を基礎に作られてるんですよ。ですのでそこは制度論だと思うんです。その辺りがあって、恐らくこの資料1の2ページ目、ある意味東京とか、それに次ぐ関東地方に対して、奈良県がそうなんですけど、若者の投票率が高いという結果だと思うんですけれども。そうなるちょっと制度的なところってなかなか簡単には動かせないと思うんですけれども、よろしければ事務局の御見解をお聞かせ頂けるとありがたいです。

(森口書記長)

原則論から言えば、住民票っていうのは自分の住んでいるところになるんで、例えば大学進学した時なんかは、やっぱり基本的に住民票を移すっていうのが原則なんです。そしてたら大学進学した先で、そこでも選挙にしっかりと加わることができる。

(川眞田委員)

私も住所が鹿児島にあったので、徳島の選挙そういえばスルーしたことがあったなあと思ったりしたんですけど。それと改選の時だったか、はっきりと覚えてないんですけども、投票率が若者がちょっと高く見えて、数値的に高齢者の方がちょっと低く見えた時があって。その原因が雪が降ったとか雨が降ったとか、物理的な環境要因があった時があって、確かに足は遠のくよなあっていうのがあったんですけども、そういう外的な要因で選挙が左右されるってどうなのかなあって思うことがあって。もう少し前に「ネット上で選挙が解禁」っていうのがあって、ネットで選挙ができるんかなあって思ったらそうじゃなくて。選挙活動がネット上でできますよっていうことだったかと思うんですけども。Webとか、物理的な環境に左右されない状況で投票ができるっていうのが、本当は一番望ましいんだろうなあと思ったりするんですけど、そういうのはシステムのすごく難しいことだったりするんですか。

(竹内委員)

オンラインの話ですよ。システム的には組めるんじゃないかと思うんですけども、

やっぱりその個人情報であるとかセキュリティである不正対策というところを言い出すと、かなりキリはないので、お金もかかるし大変なことかなと正直思いますが、何でもかんでも悪いから、ちょっとでも0.001パーセントの不安があるからやれないんじゃないに進まないの、ある程度メリット・デメリットを勘案してやるべきタイミングにきてるんじゃないかなと僕は感じています。

(青木部会長)

その流れで、竹内委員、お願いします。

(竹内委員)

まず前提なんですけれども、今回何故若者は行かないのかとか、どうすれば投票率が上がるかとかだと思っんですけど、そもそも今の選挙の制度とか政治の制度にちょっと問題があるかなと僕は思っていて、人口ピラミッドに対して今の1人1票が平等ですってというのがちょっと本当に平等なのかどうか、きわどいタイミングになってきてるのかなと思っってます。それに対して若者が政治不信にもなったりとかもしているっていうすごい大きなところも問題があると思うので、投票率だけを議論しても仕方がないところが正直あると思うんですが、これはもうかなり難しい問題なので置いておいて。とはいえ、現行制度でどうやったら頑張れるのか。やっぱり無関心はよくないと思うんですね。今の制度でやりきるだけやりきった上で問題があれば変えれば良いと思っっているの、投票率を上げるっていう活動は大事かなと思っってます。だから今日はそちらにフォーカスしていこうかなと思っってます。そして制度をですね、やっぱり僕はオンライン化は望んでいます。やっぱりオンライン化してくれたら僕自身便利ですし、投票率は絶対上がるかなと思っってます。後はそれに対して、デメリットに対してある程度我慢できるかかなと思っっておりまして。後はやっぱり純粋に選挙活動がうるさいと僕は思います。どう考えてもうるさいので止めた方が良いでしょう。SNSとかTwitterでやるんだったら、そっちでやって下さい。うるさいって純粋に迷惑じゃないですか。皆さんうるさいって思ったことないですかね。僕、子供が起きてすごい迷惑してるんです。迷惑なことを政府が良しってしてるのがおかしいんだと思うんですね。中には選挙活動うるさいだろうから私は街頭演説をしませんっていう方が何人かいらっしゃいますよね。でもその方がじゃあ当選してるかっていうと僕は苦しいと思うんですね。やっぱり何だかんだでうるさいながらも耳に聞かされるとその人の名前しか覚えなくて、うるさいからやらないんだよっていう人は多分覚えられなくて結構厳しい選挙戦になってる。だったら制度で助けてあげないといけないと思っんですけども。街頭演説無しとか、かなり時間を制限するとか。例えば駅前の限られた場所に限るとか。何かしないとちょっと、国がうるさい迷惑なことを許してる様に僕は感じている、その辺りもちよっと若者には受け入れ難いかなと感じてます。

あと数字なんですけど、高校生アンケートで80パーセントが「行く」または「たぶん行く」と言ってるんですよ。ここまでは一定の成果ですといったお話だったと思うんですが、じゃあ80パーセントあった人はどこへ行ったのっていう話だと思うんです。いざ投票させたら40パーセントだった訳ですよ。だから20パーセントの人が行かないって最初から言ってる人の理由はここでリサーチできてると思うんですけども、僕はこの80パーセ

ントから40パーセントに減衰した理由の方が気になるんで、そこもやっぱり課題として。投票率を上げたいんだったら、その40パーセントを取りに行くのが一番おいしいのかなっていう気がしますね。

あと最後に、今回SNSとかTwitterでも選挙についてアピールしてましたという話なんですけど、僕はSNSとかTwitterは仕事の関係でかなり徳島県のいくつかも見てるんですけど、知らなかったっていうのが正直なところなんですよね。割とこの辺りは、もう少しそのSNS・Twitterを作りましたで留まってしまってるんじゃないかなあっていうのが感覚的な感想です。以上です。

(青木部会長)

SNSせっかくなんで、書記長Facebook設立されたって言うんですけど、どのようなタイミングでどのようなアクセス件数があったのか。そういったPRに関しての数値とかかそういった効果的なことは検証されたんでしょうか。

(森口書記長)

Facebookは従前からやっております、今回の参議院議員選挙に向けて、特にTwitterを選挙管理委員会が立ち上げました。そのTwitterを立ち上げましたよっていうPRは徳島新聞、県政記者の方にですね、資料提供をさせていただいて新聞に書いていただくとかかそういうことで始めました。実際のアクセス件数ですけども、これはなかなか現実問題100件くらいのフォロワーがあったと思います。ただもう一つ、ここで工夫したのが、仰るように知らなかったら広まらないということで、実は上野優華さんを選挙啓発大使にお願いして。実は彼女もTwitterをやっているフォロワーがいるんです。例えば彼女から、自分が選挙啓発大使に任命されたよ、とかそういうのは彼女でツイートしていただいて、それでうちのツイートも見ていただくとか。そんな何とか広める工夫をやっていったところなんです。逆に言えば、今回そういうふうに御指摘いただいたように、やっぱりTwitterとか興味がある人しか見にいかないですよ。だからどうやったら興味を持っていただけるのか。やっぱり選挙っていったら難しいから、こんなんやっても仕方がないっていう意識がどこかにあるのではないかなと。我々もツイートしてきたけど、どんな情報を提供したらみんな見るよねとか面白いよねとか、意味あるよねとそんな観点からも、お言葉を頂けたら嬉しいなと思います。

(岡田委員)

ちょっと思うんですけど、投票率自体を上げることが目的なのかっていうところで。多分結論としては、投票率を上げること自体が目的でなくて、若者の意見を世の中に反映させていくことが目的だと思います。何故かという今この状態では、高齢者あるいはその世代の意見が反映され過ぎて、過度に将来に負担をかけてしまうような政策が通りがちというか、そういう事が問題じゃないかなと思ってます。じゃあその若者の意見を政策なり政治に反映していくことを目的とした場合に、まず選挙とかに頼る必要があるのかっていうところを僕は疑問に思っています。というのは、今の若者が疑問に思ってること、例えばこの道通りづらいとか、後はもっと遊び場所がここに欲しいとか、友達とコミュニケーション



ョンが取れる場所が欲しいとか。本当に18歳19歳が課題に思っていることというのを本当に聞いてみたいなという感じがします。それを本当に政治的なもので対応できるのかどうか。それが今小さいコミュニティの中で対応できることであれば、自分たちでやっちゃえばいいと。自分たちでできないことを最終的には政治的な部分だったり、行政的なところで、法律であったり、ネックに引っかかってきたところで、じゃあ選挙に行かないといけないねっていう、そこで意識するっていうステップがまず必要かなと思っています。だから選挙はいらない。若者の意見としてはね。別に選挙行かなくていいじゃん。自分たちでどうにかできるだろうみたいのところからスタートしてもいいんじゃないか。それが結果的に、政治に興味持ったりとか行政に興味持ったりというところに繋がっていくんじゃないか。むしろ徳島県としては若者の人は選挙に来なくてもいいですと謳っちゃうというのが面白いかも知れません。自分たちでどうにかしろ、というのはどうでしょうか。

(近藤副部長)

選挙をすることによって、どういうふうに自分たちの将来が変わっていくかとか、良くなる方向の意味で変わっていくかとか。身近なところで、選ぶ人によってどう変わっていくのかっていうのを、多分実感してない若者が多いと思うんですね。それはもしかしたら大人も一緒に、そんなには実感してなくて、付き合いがあるからとか、この人と繋がってるからっていうところで投票してる人もいるかもしれません。若者としては高校生とかどちらかっていうと育ててもらってる人達っていうのは、税金も親が払ってくれてるとかそういうところで、なかなか実感として感じるところが少ないんだと思うんですね。その辺りをいくら大事なのよ、とか、こういうところで違ってくるのよって言うても、やっぱり感じないと。明細見て「わぁ税金高い」ってかかって。じゃあこの税金が高い中でどんなふうなことを一緒に取り組んでいけるか。どんなふうなことを一緒に取り組んでいける政治家なのかっていうのを考えていける様になってからなのかなっていう気もします。だからって、じゃあしょうがないなあではなくて、何か考えないといけないんですが、今岡田委員が仰った様に、何を困ってるのとか、将来にどんな不安があるのとか、ハッピーな意味で、どんなふうに過ごしたいのっていうのから探っていくって、そこを實現するとか解決するとかっていうのに当たって、さっき岡田委員が仰ったようにつまずきがある、これは政治でするのが一番効率的とかっていうようなところを我々としても、若者の意見を吸い上げてちょっと分析していく必要があるかなと思います。それが魅力的に感じるような、何か要因があるとか、解決する為にはこういうところが必要だっていうのを明らかになっていくと、行動の理論としてはそこに行くように、じゃあどんなふうに施策をやっていくとか、どんなシステムにしていくとかそういうところが、後から付いてくるんじゃないかなあとか。だから制度を変えます、それはもちろん投票率も上がりますし、私もWebで投票できたらめっちゃ楽だなと思いますが、その前に、じゃあ若者ってどんなことを考えているのか、どんなことを必要としてどんなことに困ってて、どんなことをハッピーと思ってるのかなっていうのをもうちょっと詳細に分析していく必要があるかなというふうに思います。選挙は要るかどうかという、その辺りではまあ、意見を吸い上げるっていうところでは、選挙の手前の問題だと思いますので、そこはちょっと分析していく必要があるかなと思います。

(岡田委員)

選挙をやらないうっていう代わりに、僕らが18歳19歳の意見をしっかりと吸い上げていく役割を果たさなきゃいけないと。

(松本オブザーバー)

僕の考えとしては、選挙に興味がある無いうっていうか、選挙って結局は政治に参加するかしないか。政治に対して思うことが無ければ投票に行く可能性っていうのは落ちるといえるか、投票率は下がるのかなと思います。なので選挙に対する啓発っていうのもあるとは思いますが、同時に政治・行政が自分にいかに密接なものであるかというのを啓発活動として教えていくようなのが必要じゃないかなと思います。若い子だと、さっきもお話にもありましたように、税金も払ってなかったりしたら、その税金がどう使われているかというのを興味を薄れるところだと思いますし、おじさんとかが国会とかをしよるよなっていうのをほわ〜としたイメージで見てる若者っていうのが多いんじゃないのかなと思います。なので自分の生活と政治の関わりとかを知っていただいたら、自ずと選挙に行ってみようかっていう流れになるんじゃないかなと思います。

(蔭山委員)

多分この中で私が唯一、選挙カーでうぐいすをした事があるんじゃないかなと思うんですけども。何年前かに知り合いに頼まれて一度うぐいすを何日かした事があるんですけど、先程、竹内さんから選挙カーを何故やるのかどうかっていうお話があったと思うんですけども、私も乗っていてそれを凄く思いました。昔ですと地方に住んでいる人に情報の発信源というか、技術的に発信できなかったの、候補者が行って話したりするのが必要だったかもしれないんですけども、今だったら他のインターネットだったり他のものを使って発信できますよね。私も父や母は60代ですけども、普通にスマホも使えますしパソコンも使えます。オンライン投票になったらすぐに投票できると思うんですね。だからあと10年20年経ったら、全員がそういう状況になると思いますので、まず車に乗って大きな声を出しながら会いに行く必要は無いかかと。会ったとしてももう1秒とかですよ。本当に握手するかどうかというところで。うぐいすしていてもアナウンサーとして凄くやり甲斐が無いなと思ったのは、とにかく名前連呼してくれと。30分交代12時間名前連呼なんですよ。政策とかもちょっと入れたいなと入れたら、「いやいやいらぬ、とにかく名前名前」と。例えばその時の候補者が蔭山だったとしたら、地元の方は「かげ(↓)や(↑)まさん」って呼んでるとしたらなまらなきゃいけないって言われて。何回か普通に標準語で言ってしまったんですけど。ずーっと何をしてるかという、結局イントネーションとかで親しみのある名前をひたすら呼んでるだけなので。だったらもうスピーカーで録音したものを流してたらいいんじゃないかなって気持ちにはなったんですよ。候補者が実際話すとか、そこで何かを発信するっていうのは凄く意味があるとは思いますが、ひたすら部外者の人が同じルートを何回も何回も回って迷惑だなんて思いながら、一応学校・病院・信号で止まって言わないっていうルールはあったんですけども、ずーっとただ名前を連呼して。これってスピーカーじゃなくて生でやる理由って何かあるのかなって思った

ら、やっぱりちょっとでもリアクションしてくれた人に「ありがとうございます」みたいな事を言わなければいけないっていうのでやってる訳なんですけれども。それで私間違っ  
てカカシとかに言っちゃったことが、一人きりで。本当にその「ありがとうございます」  
っていう1秒の為に10分くらい名前を連呼してるみたいな、田舎の方に行くのですね、人  
もほとんどいないところで、ずーっと名前だけ連呼してたまに1秒くらいリアクションす  
るっていう。あんまり意味があるのかなっていうところが正直ありまして。候補者が40代  
とかで若くなってきた中でもやっぱり同じやり方をしてるじゃないですか。決められてる  
かどうかわからないですけども、ジャンパー着てはちまき巻いて白い手袋をはいて、雨  
が降ろうが風が吹こうがこのくらいの角度を保ってなきやいけないっていうのがあったん  
ですけども。それで最終的には声を枯らせみたいな感じになって、私は職業的に声を枯  
らす訳にはいかないと思ひまして、途中で止めたいと思ひたんですけど。日焼けしよう、  
声を枯らせ、何ならちょっと髪を切ってみみたいな根性論に最終的にいきますよね。その時  
の10日間くらい、声を枯らし日焼けして髪を切ったからといって、その人がいい政治をす  
るかというとは別で。その時だけ、すごく地味にしてお涙ちょうだいを狙うのもちょっと違  
うと思ひまして。これからの若い人たちというのはそういうところではなく自分たちの憧  
れのリーダーを選ぶんだという。同じ格好をして声を枯らしてるから投票するというので  
はなく、スマートで格好良くてちゃんと話せて自分の意見を言えて。この人に任せたら  
徳島のイメージアップになるとかそういう人を選ぶ時代になるんじゃないかなと思ひます  
ので、選挙のやり方も候補者も少しずつ変えていって、有権者の方も変わっていくとい  
うのが時代に即しているんじゃないかと思ひます。以上です。

(青木部会長)

選管に聞きたいんですけども、候補者のスタイルの基準などはあるんでしょうか。

(美原書記長補佐)

美原と申します。選挙の時の候補者のスタイルですが、いわゆる7つ道具というものが  
ありまして、街頭演説の時は旗を立ててやらなければならないとか、選挙事務所には看板  
を付けないといけないとか、選管が交付したものを付けないといけないとかはあります。  
候補者の名前を書いているもの、それについては身に付ける場合はたすきとかそういうも  
のだけは名前を付けられるけれど、それ以外に名前を書くのは駄目とか。例えば名前を書  
ける大きさとかポスターとかは色々決まっているんですね。そういうものはあるんですけ  
れども、ジャンパーとかはちまき付けるとかそういうルールは一切ございません。あと選挙  
運動の名前を書くというルールや七つ道具を掲示するとかルールはございますけれども、  
それ以外の候補者のスタイルとか、どういうふうに頑張るとか、そういうのはございま  
せん。

(蔭山委員)

ルールが無いのに皆さん一緒だというのはびっくりしました。色が違うくらいで。何で  
でしょうね。ポロシャツ、シャカシャカジャンパーも皆さん一緒ですよ。あえて変えた  
方が目立つんじゃないかと思ひました。

(土井オブザーバー)

海外の選挙を見ると若者の投票率がいいところは、政権教育が充実しているな思うことがあったので、そこが取り組んでいかなければならないかなと思ったのと、大学生が住民票を移さず出て行ってしまうのが多いというのがわかったので、高校で進学する際だったりとか、学校のほうで移動するようになってますよと周知していただけたら、その問題が減るんじゃないかなと思いました。あとは、FacebookとTwitterで選挙広報をしているという話なんですけども、LINEも多いのでLINEはどんな感じかなと思った次第です。

(青木部会長)

LINEはやってないみたいですね。

(池添委員)

物理的なことを1つだけ言うと、期日前投票という言い方はまず止めた方がいいですよ。投票の期間中であれば投票日は別にいつでもいいじゃないですか。別に投票日に行かなくとも全部が投票日なので。期日前なんですけど、投票日であることには変わらないので期日前投票と言わなくてもいいんじゃないかなというのが物理的なことが一点、どちらでもいいことですが。本題の方では、若者の声が届く世の中になっているかどうかが非常に大事だと思うし、それが18歳から始まることじゃなくって、地域の中で感じたことや思ったことを自分たちが意見することによって町が変わったり世の中が変わるんだよということを、多分、今の小学生くらいからは、自分がやったことと相手が本当はどう思っているかということを理解しながら自分の意見を言えるように、日本人もどんどんなっていくと思うし、実際そうなっている欧米とかだと、選挙の期日にヨーロッパとか行った時は、ブースに候補者が座っていて、気軽に誰でも話を聞きに行ける。そしてその質問に対して、もちろん幼稚園でも小学生でも中学生でも高校生でも、何かを聞きたい時にはその人にわかりやすく自分の意見を話せる候補者でなければいけないし、それをきちんと実現して返していける人でなければいけない。それはきっと、今の若者だって見極める能力はあると思うので、この人はこういうことを言いたいと、かそういうことをしたら世の中に繋がるっていうのをきちんと大人がわかりやすく説明するべきだと思うし、そこに時間を費やすべきかなと感じています。

(板東委員)

選挙啓発って言うと、さっきの選挙の勉強だと思うんですけども、こういう勉強という集団で物事を決めるっていう実践の体験っていうのをもっと早いうちからできる機会が要るんじゃないかなと思います。例えば学校で修学旅行どこ行きますかというのを普通に学校のルールで決まってると思うんですが。そういうのをクラスでここに行きたいとかこういうこと勉強したいねっていうのを、自分たちで決めるっていう経験ができるといいかなと思います。

(近藤副部会長)

私、決めたんです。高校の時にいくつか候補はあったんですけど、その中でみんなでどこに行くかなっていうのをお話して、何を学ぶかというよりは、どんなふうに遊ぶかというのがその時期はメインだったんですけど。やっぱり何を学ぶかっていうのもお話しようねっていう機会を与えてもらって。それで決まって結局満足だったかは別として、そんな機会は高校の時は私は与えてもらってたので、そういうのは本当にいいなと思います。

(池添委員)

そうですね。意見を言う言い方とか、相手のことを聞く聞き方とか。きちんとわからないことは投げやりになって、自分には関係ないし、今うちの学生とかでも選挙行ったところで何も変わらへんやんって意見の子がいて。それに対して、私は行政政策を研究の中で対象にするので、それこそ衆議院のある委員会のこの発言がって全部議事録を読むんですけど、それによってこの政策がこういうふうになってこういう案が出たんだねってところまで見たことがあるから、それが実質的に繋がってきてるという、その場になくても何となくそうかなっていうのがあるけど、これを知っているかどうか。これの簡単バージョンを小さいときからやってたら、これが国になったらこうなるんだよって言いやすいかなって思いますね。

(近藤副部長)

ディスカッションしていったって物事が決まってくるとか、初めはすごく面白い体験として捉えていったって、それが政治に繋がっていくときに選挙率が伴ってくるというところかなと。選挙率はただただ上げましょうではなくて、下から積み上げていった選挙率に繋がっていくかな、結果は後から付いてくるかな、という気はします。

(竹内委員)

投票に行くからにはその人に投票したらどうなるのかっていうのに興味があるところで、そこが薄いと一緒でしょとか何も変わらないでしょという意見になってしまうので、やっぱりそれは政治家であり自治体であり国でありマスコミの責任でもあるかなと思うんですね。ニュースで取り上げるのは良くわからない揚げ足取りで、プロレスじゃないですけども盛り上がる場所だけ取り上げてみたりだとかそういうのではなくて。実際この人が政治家になってから何をしたんですよっていうのがちゃんとフィードバックしていないと自分の意見のかがどう反映されたのかが伝わらない。最初の公約とかマニフェストとか方針のところはしっかりと聞かされるんですけど、本当にそれはできたのかなとか。その人の言っていることと、入っている政党と意見が違うけど結局どっちを取ったのかとか興味がある訳ですよね。その辺りのフィードバックを正しく。これはマスコミの責任も多分にあると思うんですね。でもマスコミをそうさせたのは視聴者であり、我々一般人である、どっちも責任はあるんですね。やはり一般人も刺激が欲しいのでくだらないものに飛びついてしまうから、今のニュースがこうなっている。双方が意識を高めないと良くなれない、なかなか根が深い問題かなと思ってます。あと僕は岡田さんとはちょっと対立意見なんですけど、多分岡田さんはショートカットしようとしてるんだと思います。今の選挙じゃ話にならない、間に合わないから若者の意見を我々が一気に持ち上げてショー

トカットして国に届けてしまえっていうかなり大胆な意見かと思うんですが、僕に言わせれば若干の反対がありまして。それはやっぱり声の大きい者勝ちとか拾われた者勝ちになりかねない。そうならないようにみんなの意見を公平に施策に反映しましょうねっていうので脈々と作ってきたのが選挙なので、そこをいきなり捨ててしまうのは僕はどうかたと感じてます。

(岡田委員)

僕は徳島のドナルド・トランプという立場でいきたいと思うんですけど(笑い)、そういう正当な考え方で選挙をいいようにしていく、それは長期的な目線だと思っていて。やはり短期的に今投票率がワースト5に入ってるというのを逆に捉えると、「選挙に頼らない県」という言い方ができるかなと。これは極端な話かもしれませんが、例えば選挙に頼らない。だけどTwitterではめっちゃバズってるみたいなの。今Twitter見ても全然バズってなくて、ずーっと綺麗な感じで動いていて。むしろこれをこうしろっていうのがどんどん上がってきて、知事から今はこれできないだろうっていうのが入ってくるのか。そういう雰囲気も必要かなと。

(蔭山委員)

私も今回このテーマがあることを知って、県の方の許可を頂いてFacebookの方に、もし皆さんアイデアがあったら何でもいいので書き込んでくださって載せたんですけども。私のフォロワーは1,200人ほどいるんですけども書き込みは4件でした(笑い)。うち1件は関係ない書き込みだったので3件でしたね。そのうち本当にアイデアを書いてくれてたのは2件だけでした。それだけ見て下さってもアイデアを書いてくれるっていうアクションを起こすのは高いハードルがあるのかなと感じました。

(近森委員)

私は年に一回アフリカのザンビアという国に行くんですが、実は今年の夏に大統領選挙がありまして、でもそうなるかと命がけです。下手したら死人が出るんじゃないかというくらい、国民自体が本当に命がけで選挙を迎えます。私たちはJICAから助成金を貰ってザンビアで活動をしているんですが、そちらにも影響が出ます。というのは暴動が起こったり選挙の結果によっては政治が立ち行かなかったりするので、渡航制限とか色々関わってきます。それを考えると、語弊を恐れずあえて言いますが、本当に日本は恵まれていると思います。先程誰かも仰っていたように、高校生の意見の中でも誰がやっても変わらないというのがあると思うんですけど。ザンビアでは誰がなるかによって凄く変わるんですね。この人がなると直接自分に影響があるっていうので、それは本当に色んなレベルがあるんですけど、本当に命がけで選挙は行われているんだなというのを、今回ひしひしと感じました。今回選挙についてお話をするきっかけがある中で、ザンビアや日本の状況を考えているんですが、お示しいただいたグラフで、年齢が高くなるほど投票率が上がるっていうのがあります。それは何故かと考えていたんですが、自分事として感じてくる度合いが上がってくるから、選挙行ってこの人に投票することで自分にいくらか返ってくるものがあるから、選挙に行く度合いが増えてくるんだと思うんです。そういうのを今から、高

校生の方たちにも選挙に行くことが自分事として捉えられる主権者教育というのをさせていただくというのもいいのではないかと思います。

あと岡田さんの意見なんですけど、私も選挙イコール若者の政治参画とはあまり思わないんです。というのも選挙は1つのツールであって、私たちもそうですが若者の政治参画になるとは思っていないくて、選挙もあれば、徳島大学だと真夜中にプレゼンをする“まよプレ”というのがあると思いますが、あれも直に若者の声を聞くというのがありますし。若い方で色々徳島を良くしていこうと活動される方もいますし、色んなファクターがあって絶対いいと思うんですね。でも選挙っていうのは自分たちでできないことを代表を選んでその人にやってもらうので、選ぶことだと思うんですね。自分と同じ想いを持つてる人を選び、この人だったらいいかなというふうに選挙に行くんだと思います。そうあって欲しいという思いもあります。自分がどういう人を選ぶか。例えば大学生の色々やっている場所に足を運んでくれそうな人とか。私だったらこの人いいなと思うんですけど。そういう事で何もかもぶつっと切れるんじゃないで、繋がりを大事にしたらいんじゃないかなと思っています。自分が選ぶ人がいなければ、自分が立候補すればいいと私は思っています。それでもやっぱり良くしたいと思う気持ちが一番大事だと思っています。

なので、何故選挙に行かないのかっていうテーマなんですけど、何故行くのかって考えた方がいいんじゃないかと思います。否定的な質問よりも、何故行くのかという方に議論を進めた方がいいのではないかと思います。

うちの娘がもうすぐ18歳なんです。「行くの」って聞いてみたんです。「行く」と。それは何でって聞いたら、投票することって当たり前でしょって。うちはそんな高等な教育していないので（笑い）、何でかなと思ってたんですが、結構家の中で話をするんですね。誰に入れるかは言わないですが、この人はどうか、家庭の中でも会話の中に結構出てきて。家族も行かないとっていうのは正しくその通りで、高校生に主権者教育しているのは自分たち大人だっていう思いは捨てずに、良い意味での危機感というのは持つべきだと思います。私も今の国を見てて本当に日本は恵まれているなと思うと同時に、危機感を持っています。良い意味での危機感を持って、例えばこういう選挙の投票率に反映できるようなものであればいいなと思います。

（蔵本オブザーバー）

近森さんから、何故行くのかという観点から考えてみたらどうかというお話があったんですけども。投票率を見た場合に、年齢が上がるにつれて投票率がアップしている、でも18歳と19歳で限って見たら、18歳の方が投票率が高いというのが投票率の流れに反しているところが目立っています。では何故18歳と19歳だけで見た場合、18歳の方が投票率が高いんだろうと考えてみた時に、当然始めの方で議論にあった住民票の問題もあると思うんですけども、それを差し引いても、18歳であれば恐らく家族と一緒に行くのかなっていうのがあって。19歳であれば大学生になってる人も多いし、「自分で行きな」と親が言ってしまう部分もあるかなと。それを考えていくと、どういうふうに興味を持たせていくかという。その興味を持たせるのを、家族の中で話をしていくとか以外に、教育としてどういうふうに大人が手助けをしていくかということを考えて時に、18歳の高校生対象の出前講座とかでなくて、多分一部は行っていると思いますが、小学生に対してもその出前講座をや

るというのも一つの手かなと。それを長期間に渡って継続的にしていってたらどうだろうと思いました。

資料にもあるんですが、市町村の選管の取組として、小松島市が18歳の啓発サポーターを選任して街頭で呼びかけ、と書いてあったので選管の人に聞いてみたんですけど、18歳の啓発サポーターは今のところ1人と言っていました。街頭というのは何処でしたのか聞いたら、南小松島駅で参院選の前に1日だけやったと。汽車で通学する高校生とかを対象に、クリアファイルとかウェットティッシュとか選挙の冊子とかをサポーターの人と選管の委員さんや職員さんと一緒に配った、と言ってたんですけど。反応はどうだったって聞いたら、選管の人はあまり受けとってくれなかったって言ってたので、それが何となく投票率を物語っているかなというのがある。かなり難しい問題かなと思いました。

(山下オブザーバー)

頂いている資料を見ていて、徳島県の18歳の投票率41.2パーセントで19歳が30.7パーセントということで、先程、蔵本さんが言っていたように、県外の学生さんが多いのかなと。41.2パーセントが低いのか高いのか。全体も46.98パーセントという話があるんですけど。私がそれぐらいの時ってどう思ったのかなってふと思ったんです。実際ここまで色々考えよったんかなってというのが一つあって。いろんな人がさっき言ったように、年をどんどん重ねていくごとに、だんだん意識しだしたっていうのがある。じゃあ18歳くらいの子には主権者教育がありますけれども、浸透していくのかなってというのがあって。まずは身近な問題からいろいろ取り組んでいく。例えば一番身近でいえば市町村選挙や市町村議会とか、そういう身近な自治体とかがあるので、そういうところで自分達の身近な問題として地域や家族を考えたらどうかなと。私の家の例で言うと、やはり田舎なので元々選挙に行くもんだというところがありまして。扱っている問題とかが市町村レベルだと小さい問題から扱っているの、例えばそこの側溝を直してほしいとか、じゃあこれを直すにはどうしたらいいのかとかよく家族で話したというのがありました。話は戻るんですが、41.2パーセントが果たして低いか高いかわからないんですが、まず私は行くべきだと思うんです。行ってまず経験を持つ。参加して、それからがどうなのかなと思います。少し前に佐那河内でゴミ問題で二分化してもめたんですけど、若い子でもしっかりした意見を持って議論していました。まずはそういった身近な問題を話す機会ってというのがすごく大事かなというのがある。そういう積み重ねで選挙にや政治に興味を持ってもらう。やはり身近なところからやったらいいのかなと思います。ただ関心事で言うと、国の衆議院とか参議院の方だと思うんですけども、非常に複雑化していてなかなか難しいので。まずは身近なところからやってみたらどうかなと自分なりに思います。

(石井オブザーバー)

私は板野町の職員として、選挙事務のほうで、いろんな選挙の投開票に従事しました。その感想になるんですけど、期日前投票や当日含めてなんですが、皆さん仰ったように、若い人はまず1人では投票に来ません。まず見ないです。特に20代前半までの人はお母さんお父さん家族ぐるみできてる方が多いです。1人でできている子を見ると、びっくりするくらいです。家族で話し合うというのが今出たと思うんですけど、さっきも仰っていた税



金を払ってないのにわからないというのはあると思うんですけど、例えば学校がどういう補助金をもらって建てたとか、どこから財源が出てるとか、どこから借金をして建てたとか。そういうのをもっと示してもいいんじゃないかなと思います。

あと若い人なんですけれども、選挙に行きにくいと思うんです。みんなすごく緊張して、本当に。投票所に入ってくるのに、震えてる子とかもいまして（笑い）、こっちが大丈夫ですよって言うぐらいに。これは市町村の課題ではあると思うんですけど、もうちょっと入りやすいように何か工夫ができたらなど。板野町の場合、たまたま選挙の事務に今年高卒で入った子や20代の子がいて、ちょっとまだ行きやすいかなとは思いますが。

知らないお偉いさんがずらーっと並んでたら、私くらいの年代の友達でも行きにくいっていうのがあると思うので、ちょっとその辺を見直したらいいかなと。

あと不在者投票の件なんですけど、うちの選管に確認したら、板野町は多かったかなって感想だったと思います。皆さんネットで調べて請求書を送ってもらわないといけないんですけど、投票はネットで難しいかもしれませんが、請求くらいはネットで申請できないかなと。そしたら1個だけでもハードルが低いのかなと思いました。

あと県の選管の前で言いにくいんですけど、今回の合区がちょっと（笑い）。徳島でも高知県のことやわからんわって結構言いながら投票する人がいまして。徳島県でこれなので高知県はもっとだと思うんです。その辺りも影響があるのかなと思いました。

（青木部会長）

ありがとうございます。皆さん一通り御意見を頂きました。その中でたくさんキーワードも出て参りました。皆さんこれを言いそびれたとか御意見があれば何でも構いませんので。18歳・19歳の視点はひとまず置いていただいて、御意見・御発言をお願いしたいと思います。

（近藤副部会長）

さっき山下委員が仰ったように、行くのが当たり前っていうのが、すごく大事だと思うんですよね。小学校の時からずっと、クラスの級長だったり生徒会長を選んだりする時って、「私、投票しません」なんて言う人少ないと思うんですけど、何であれは投票するんでしょう。絶対しなさいって強制ではないですよ。雰囲気的には絶対しましょうという感じかもしませんが。でも選挙はその延長じゃないですか。本当に皆さん仰ってたように、身近な問題として感じて、行くのが当たり前という空気感を我々自身を含めて、作っていかないといけないと感じたんですが、あれって何でみんな投票してるんですか。

（近森委員）

匿名性が高いからじゃないですかね。今例えばここで次の会長を選びましょうって言ったら、目立つじゃないですか。あの人手挙げてない、参加してないとか。でも選挙だと匿名性が高いので、自分が行かなくても誰か行くわと。さっき言ったように誰がなってもいけるし。そういうところの心理が働くんだと思うんですよ。数を大きくすればするほど、どうしてもそういうことが起こるんじゃないかなと思います。

(近藤副部長)

どうやったら「行った」「行ってない」が。

(近森委員)

選管さんは持ってますよね。本当は匿名じゃなくて、誰が行ってるかの個別のデータは絶対あると思うので。

(近藤副部長)

行かないことを選ぶのも意見かもしれませんのでね。

(岡田委員)

それは多分もっと小さい感じで、家族の中で行った行ってないかがあれば、何で行かないのって話にもなると思うし。そういう小さいコミュニティなり、最小単位が家族になると思うんですけど、家族と一緒にいたり、あるいは友達の中で行った行ってないの話がする機会が増える必要があるってことですかね。

(近藤副部長)

私は20歳になって初めて選挙行った時、やっぱり親と行きました。皆さんどうなんでしょうね。若者に行ってと言っても、連れて行ってあげないと、本当に緊張するんですよね。どんな順番でどうやって書いていったらいいとか、どんなルートとかも何にもわからないままブラックボックスみたいな投票所の中に入っていく訳なので。そこでどんな動きをしたらいいかなってイメージって、動画で公開されたりとかしてるんですかね。そんなのがあれば行きやすいし、家族も一緒にいったらいいかなと。

(蔭山委員)

今思ったんですけど、18歳で初めていきなり選挙みたいな雰囲気になるから緊張するんじゃないかなって思いまして、やはり小学校・中学校の頃から慣れているというのも大事なかなって思ったんです。今、クラスの委員長や生徒会長とかの話が出たと思うんですけども、今って学校の現場ではどういうふうに、やはり立候補の形で決めてらっしゃるんですかね。

私の時代はやっぱり立候補っていてもいなくて、みんな控えめで。結局先生が成績が良い子を指名して、やる、みたいな雰囲気だったんですけども。私個人の意見としては成績が良い子じゃなくてもいいじゃないですか。AKBみたいな感じで、とりあえず全員立候補して、全員がポスターを作るくらいして、一人一人、もし自分が委員長になったらクラスをこんなふうに変えますみたいなことをみんなの前で発表できるくらいの発言力を、小学校・中学校からずっと鍛えていって。この子成績良いけどあの子の案が良かったからあの子に投票しよう、みたいなことが話を聞いてみたらきっと生まれてくると思うんですよ。それで実際に学校でクラスの委員長とか生徒会長選ぶまでに選挙期間みたいなのがあって、お互いにディベートしたりして、最終的に似たような投票箱を作ってみんなで投票してみて委員長を決めるみたいなことをずっとやってれば、きっと18歳になって、本当の

選挙になった時に同じような感じだなという雰囲気になるんじゃないかなと思ったんですけども。今の学校の現場がどんな感じなのかわからないんですが、私の時代では立候補なんかとんでもないという雰囲気があったんですが、今はどうなんでしょうか。

(後藤学校教育課長)

全ての学校の状況がわかってる訳ではないんですが、やはり自主性を尊重するというのがあるので多分担任としては「立候補する人いませんか」という声をかけると思います。でもなかなか手が挙がらない場合は、やはり投票というのが普通だと思うんですけども。特に中学校・高校になりますと、生徒会長とかは立候補して一週間ぐらい運動期間があってポスターを作ったり、学校とか個人によって程度の差はあると思うんですけども、立ち会い演説会をして投票するという形は取られていると思います。今年の事例なんですけれども、先程も話題にありました小松島高校におきましてはその生徒会長の選挙の時に選管からの投票箱を借りて会見をしたという取組もありましたので、そういう生徒の自主性を引き出していくような活動を進めていければ、主権者教育にも役立つのではないかと考えております。

(池添委員)

私は高専なので半分高校です。担任もしてるんですけど、高専は公立高校よりも緩いのか本当に、学業優秀でなくても生徒会長に立候補して、2人くらい全校生徒の前で演説しました。演説も茶髪OK、制服止めますみたいな内容から、本当に学生たちが身近な問題から大きなことまで色々話をして、フリーです。教員たちは入りません。そして教室に帰って、一時間後ぐらいに、放送で会長は誰々になりましたって言ったら、教室で大歓声です。ものすごい興味があります。なのでやっぱりそういう自分に身近なこと、直近なことについては誰でもそうだと思いますけど、選びたい意思もある。話を戻しますと、やはり小さい時からそういうことが学校の中だけでじゃなくて地域のことでそういう経験があって、町づくりのや地方創生の話になりますけど、そういう経験があって、全部が繋がってるっていう実感を持てるように仕向けないといけないと思うし、その小さなコミュニティの中で子どもたちが投票して決めて、実際に役所とか全員動いたらいいと思います。長野県のある自治体で、中学生の遊び場っていうのを持っているところで、地域福祉計画とかで有名なところなんですけど、そこは住民100人運動とかで中学生も全員町づくりに参加して、中学生が全部その場を運営していて。バンドをすとか漫画読むとか、その希望に叶えられるような遊び場で。それを市役所の人と一緒に運営していく。中学生の思春期とか自分の意見を持つようになった時に、そういう経験があったらその後ずっと地域とか色んなところの関わり方が変わるだろうなというのを思いました。

あと選挙の経験があるかないかは、子連れ投票を推奨したらそれでいいんでないかなと思います。私も普通に子供を連れて行っているから、多分子供はもう知っているとします。

(青木部会長)

近藤副部会長が言われたように、実は私は小さい時から級長・生徒会会長・高校・大学も学生自治会の会長ということで、選挙全て勝ってきました。一度も負けたことはありません。

せん（笑い）。逆に言うと、皆さん仰ったように、小さい時から家族からクラスといったところまでの小さなコミュニティから選挙に対しての学んでいくことが大事なんじゃないかなと思っております。

ふと思えばですね、確かに小学校の時に級長・副級長を選ぶのに選挙をしてました。あの頃は私もわからないまま選んでいたり、自分が選ばれたりといった気持ちはありました。中学・高校になると先程池添委員から仰ってた通り、色んな身近な学校生活の中でのこうやるんだそうするんだという公約を作ってやった覚えがあります。私も高校時代、不良共に囲まれてですね、体育祭をしろと、そうしたらお前に投票したるわと言われて、母校で体育祭をしました。そうした経験も確かにしました。

今思えばですね、だから何が大事かというところ、そういった小さなコミュニティから発生していく、選挙の教育というのを小さい頃からしていくことはこれからの時代に大事なんじゃないかなと思っております。私の意見としては、10月15日の徳島新聞に若者提言という若者グループ「あわかん」の代表の方の新聞記事に大変関心を高めておりました。何が言いたいかというところ、関心を高める鍵はやはり教育があると、徳島新聞の提言というところで一覧に出ておりました。やっぱり17歳18歳の方が考える視点からすると、学校での教育の充実が欠かせないんじゃないかと、これは部会長としてではなく、私個人の意見として出したいと思っておりました。

何よりも皆さんが言われた通り、身近な施策であったり身近な出来事を変えられるんだという実践的なことをやはりリアルに体験することが大事なんじゃないかなと思います。身近な人とか、この人知っとうわという人が選挙に立候補すれば、じゃあ投票行こうかといった、一つの社会的な関心にも僕はなるんじゃないかなと考えております。

それともう1点は、皆さんが仰られるとおりの雰囲気づくりですね。先程石井さんが仰られたとおりの、投票場に行ったら入りにくい雰囲気があると。確かにそういった感覚になられるんだと思います。ですから親御さんと一緒に行ったらいいんじゃないかといういい御意見も出ておりました。つまりそういったみんなの機運を盛り上げていくというのも一つの方向性じゃないかなと、私個人の意見として皆様に聞いていただこうと思ひ発言させていただきます。

（近藤副部会長）

環境の問題として、投票場を増やすって結構大変かとは思いますが、私は引っ越し度に投票場が変わるんですけど、場所がいつもわからないんですね。正門から入って車を止めさせてもらって、どこの建物なのって結構迷いまして。そういうのももう少しわかりやすくしてもらえたら助かるなというのがあります。

多分若者で、高校生とかは自分たちが通ってる所とか通ってた所で投票できるかもしれませんが、大学生になると全然違う地域に来て、そこの地元の小学校とか公民館とかって知らなくて。どう行こうかな、そこって車で行けるのかな、自転車どこに止めたらいいのかなとか、そういうのも不安だと思いますので、そこのところの情報提供は簡単にできると思いますので、していただけたら大変助かるなと。ハードルは少し下がるかなと思います。

(岡田委員)

そもそも本当に選挙で若者の意見が反映されるのかというところがやっぱり疑問で。竹内委員が仰ったように、まず数の問題でもあるかなと。高齢社会の中で数的に少ない。じゃあそれって本当に選挙でまともにやりあったとしたらやっぱり負ける。若手議員や若手首長、町長が出たとしても負けてしまう結果にならないかとか。そういうところが本質的な問題として残っちゃう気がするんですけど。それに対してこの若者クリエイティブ部会が何ができるかというところはありますか。

(竹内委員)

やっぱり若者の人口ピラミッドが狂ってるのが、かなりの問題になっていて、僕の個人的な方法としては、平均寿命に対してあなたは何年余命が残っていますかということで、一票じゃなくて加重票にしてしまう(笑い)。生まれたばかりの子はまだこれから80年あるのに対して、70歳の方は平均余命に比べてあと10年です。8倍差がある訳です。あなたは8倍の票で8票、あなたは1票と。もう80歳を超えた人には申し訳ないですけど、平均余命を割ってるということで0票ですと。というのを僕は本当にしたい。でもそんなことできないんですけど、だからといって若者に頑張れ頑張れと言ってもやっぱり数が足りないんですよ。じゃあどうするかというと、若者にフォーカスして何か施策を打つんではなくて、もっと世代間で交流させよう。お年寄りや20代の人たちを例えばこういう場に寄せて、話し合わせる。話せばわかると思うんです。お年寄りにしっかり若者の意見を聞いてもらって、お年寄りを動かす。あなたの票を私にくださいじゃないですけど、僕がこの人に投票しようと思ってるから、お年寄りの人をしっかりと説得してその人の票を貰っちゃえばいいんです。そうすれば実質上の差は無くなるかなと思って。だから世代間の交流の場を選挙に絞ってかなり増やすのは、大胆な案のもうちょっと手前のまろやかな解決なのかなと(笑い)。

(近藤副部長)

徳島って意見をすくってもらえる場が減ったじゃないですか。3区あったのが2区になって。減るってなるときに地方の声が余計に届きにくくなったなっていうイメージはあったんですね。今の制度では、人口の分布としては仕方ないところはあると思うんですけど、減って届きにくくなったなっていう思いがあるのと同じで、先程お2人がずっと仰ってるように、やはり世代間の中で若者の声って届きにくいというのがどこかであると思うんですね。そんなことも含めて、皆さん仰ってるように私が一票入れたところでみたいな雰囲気になってるのかなと、そんなことも含めて考えると、自分の意見ってちゃんと通じるんだよ、届くんだよっていうのをイメージとして植え付けるとか、そういう事が実現できるような環境づくりを大人がしていかないといけないなと思います。

(岡田委員)

例えば、不在者投票みたいなのを上手く活用して、雪や雨とかで来れないお年寄りの方に若い人たちが票をもらいにくる。で、こっちに投票しといたほうがいいと(笑い)言いますよね、そういうのがあったら。今の制度でやるとしたらそういうのもありかなと思

ます。

(5分間休憩)

(青木部会長)

最後に時間のほうも迫ってきてますので、意見としてはまとまらないので自由にどうぞ。

(岡田委員)

今ここで議論したことは、どういうふうに反映されるでしょう。

(佐藤政策調査幹)

今日の議論、本当にたくさんの御意見があると思います。制度のものからすぐに取り組ができるだろうものまであると思うんですけど、まずは、県の方で来年度の予算編成作業に入っていくことになります。来年度の予算の中でも当然主権者教育ですとか選挙啓発の取組を、それぞれの市町村ですとか教育委員会で取り組んでいこうとする中で、今日の意見をできるだけそういった中でも生かしていきたいという趣旨で、今日は開催させていただいたところでございます。先ほども申し上げましたように、当然すぐにはできるものとなかなかできないもの、それから選挙の本質にかかるような御意見とかたくさんあったと思いますので、そういったところは今後の課題として捉えながら、まずは来年度の予算の中で、いろんな取組をしていきたいと考えております。

(岡田委員)

逆に若者クリエイト部会で何か取組をして、何かお手伝いできるようなことがあればまた言っていただきたいと思います。

(青木部会長)

今日のようにまた開くことは正直なかなか難しいことだと思いますけど、逆にできることを若者クリエイト部会に言って頂いてもいいですし。最後に若者クリエイト部会として、こうだよという御意見があれば委員の皆さんにお聞きしたいんですけど。

(蔵本オブザーバー)

若者クリエイト部会のメンバーで、出前授業に行くというのはどうでしょう。

(青木部会長)

我々が行くということ。

(「1人1校担当」という声あり。)

(青木部会長)

ハードル高いですね(笑い)。でもいい意見だと思います。

(蔭山委員)

参議院選挙の時に、どこが主催か忘れちゃったんですけど、アフターパーティーみたいな感じで、キャンパスボーイとかお笑いライブを徳島大学で開催して、投票場の看板と自分の自撮りの写メがあれば入場無料というお笑いライブを開いてたんですね。そういう様な形で投票日の夜に何か楽しいイベントがあって、若い人たちが何か投票したという証明ができれば参加できるみたいな、特典みたいなのがあっても面白いんじゃないかなと思いました。

(近藤副部長)

J Cが企画したやつかなと思います。私も投票日が近付いてる時に試験を徳大に受けに行ってたんですけど、看板持ってお声掛けしてくれたんですね。私は対象ではないんですけど。そんなふういろんな人がいろんな所で工夫を下さって、時間を割いてくださってるので、そういうことがこの部会でもできたらなと本当に思います。さっき仰ったみたいに、1人1校としてお話をするとか。2人ペアになって頑張ってる漫才してみるとか。それがどんなのでも、何かちょっとでも興味を持ってもらえるようなことを、本当に我々の中でもできたらいいですよ。どうなんでしょうか。

(青木部長)

非常に前向きな御返答だと思いますので、1人1校ならず、小学校から高校まで合わせると数も非常に多いので、1人5校から10校くらいまで担当しないといけないんじゃないかなと逆に思っています。それに関しては逆に、中学高校と実際に教育の現場に行くというのも非常に刺激にもなるし、委員の皆さんも、実際に教員の方もおられますし、高校生・大学生と常日頃からディスカッションされてるメンバーですので、選挙というテーマで行くのも逆にいいんじゃないかと思っております。

そこで更に若者の意見を吸い上げられるように、こちらからアプローチするだけでなく、高校生や中学生の子とディスカッションできるような場を設けていただいでですね、イベントとして県政の方でも前向きに捉えていただいで。行けるメンバーを派遣すると言葉は悪いですが、行けるような方向というのも策として非常にいいのではないかと思います。ほかに御意見ありませんですかね。

(岡田委員)

若者クリエイティブ部会なんですけど、年齢的に若者じゃなくなってる訳ですね(笑)。だからこそ、コミュニケーションって20代と50代っていうんでなくて、その間の30代40代が入らなきゃいけないし、10代の子の意見を吸い上げるんだったらやっぱり20代の子を通して吸い上げた方がやりやすいっていうんがあるんで、そういう意味では僕らは20代の人たちと触れ合う機会を普段から持つことができると思うんですけど、会議としてやる機会があってもいいのかなと思います。それこそメンバーチェンジ制じゃないんですけど、どんどん若い子を入れていくっていう。県の組織として委員としては難しいかもしれませんが、メンバーとして何かチームを作っていくのもいいんじゃないかと思います。

(川眞田委員)

若者の意見を吸い上げるっていうので、私以前務めていた職場によく地域活動をしている学生の子たちがよく出入りしていたので、彼らの話を聞いていると、何かやりたいと思った時に行政に許可申請とかを持って行って、上手く説明できなかつたりしたっていうのもあって、結構蹴られていて、翌年によく似たイベントを大人の人が上手くパッケージしてやってみたいな例があって。それが力量不足なところもあると思うんですけど、彼らなりに地域のことで色々問題意識があって、では自分たちの力で解決するにはこういう方法があるんじゃないかって提案はしていつてるんですけど、なかなかそれが通りにくくて。自分のアクションが世の中に何の影響も与えてないっていう無力感を感じてるのかなって思うことがあるので、そういう子の意見を吸い上げて、何らかの形で小さくてもいいので実現できるような成功体験をしてもらって、個人的なことって最終的には政治的なことに繋がっていくと思うので、そういう成功体験を持ってもらえる機会を作れたらいいのかなと思いました。

(近森委員)

本当に個人的な感想なんですけど、逆にもう若者とかいいんじゃないですか。若者というか、変えたい気持ちとか、こういうことやって楽しいとか、そういうのを共有できる場をこれから作っていくというのでいいのではないのでしょうか。年齢でそれをしないといけない時もあるかもしれないんですけど、年齢はどっちでも皆さん自分の身にかかってくることなので、それよりも思いの方が、私は重要視してもいいんじゃないかと思いました。

(青木部会長)

それではここで意見交換会としては終了とさせていただきます。最後に先ほど岡田さんが、若者クリエイト部会としては前向きな御発言等いただいたんですけど、その他の事項と合わせて何か若者クリエイト部会としてはございませんか。また何かあれば個人的にも御意見頂ければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは本日の議事を終わらせていただきます。本当に今日は熱い議論、いろんな議論をさせていただいて、御協力ありがとうございました。以上をもちまして、本日の若者クリエイト部会を閉会させていただきます。皆さん、本当にありがとうございました。